

210 救急医学における核医学検査の有用性 — 消化管出血シンチ —

森田誠一郎、石橋正敏、早瀬尚文（久留米大 放）
坂本照夫、加来信雄（久留米大 救命救急センター）

下血を来し緊急に消化管出血シンチを行なった症例を検討し、救急医学における本検査の意義について評価を行なった。症例はTc-99m RBC (in vivo 標識) を用い、緊急検査を行なった46例である。46症例のうち、シンチグラム陽性例19例、陰性例27例であった。これらの症例の本検査を選択した理由、その後の治療および予後などを検討し、大量の出血を来した消化管出血に対する本検査の意義は、1) 重症者への核医学検査の非侵襲性 2) 出血部位とくに小腸出血の診断 3) 出血の現状の把握、およびその程度による治療方針の決定 4) 緊急手術の際の出血部位が同定されていたことによる手術時間の短縮、などにあると思われた。

211 内視鏡的食道静脈瘤硬化療法による門脈側副血行路の変化と食道静脈瘤再発との関連:SPECTによる検討 東 正祥、岡本敏幸、保城秀雄、石橋一伸、金 邦源 松田裕之、柏木 徹（大阪厚生年金病院内科）

内視鏡的食道静脈瘤硬化療法(EIS)の門脈側副血行路に及ぼす影響を腹部血液プール SPECTを用いて検討し、門脈側副血行路の変化と静脈瘤再発との関連を検討した。対象はRC陽性の静脈瘤を有する肝硬変47例である。静脈瘤再発は6カ月の観察期間で判定した。SPECTは^{99m}Tc標識赤血球又は、アルブミンを用いて行い、門脈側副血行路を観察した。EIS前にcoronary vein(CV)がみられた42例中EIS後CVの消失が14例、減少が18例にみられた。静脈瘤の再発はCVの消失例で4例(28.6%)、減少例で7例(38.9%)であったのに対し、不変例では9例(90%)であった。EIS後の静脈瘤再発はCVの血液プールの消失、減少例で不変例より少なく、EISの効果判定にSPECTは有用であった。